

Title	「ハーフ」・「外国につながる子ども・若者」を問い直す
Sub Title	
Author	佐藤, 祐菜(Satō, Yuna)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.90 (2021. ) ,p.96- 99
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	2019年度博士課程研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000090-0096">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000090-0096</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 「ハーフ」・「外国につながる子ども・若者」を問い直す

佐藤祐菜

### 1. はじめに

筆者の研究課題である「人種・エスニシティの構築：日本と韓国における『ハーフ』『混血』『多文化青少年』」は、2019年度の潮田記念基金による博士課程学生研究支援プログラムから助成を受けた。本稿の目的は、当該研究課題の成果を報告するとともに、それを通じて、「ハーフ」および「外国につながる子ども・若者」を問い直すことである。

人種・エスニシティ研究において、研究対象として近年注目を集めているのが、人種的・エスニックな混濁性である。例えば、英語圏の研究では“mixed race”などと呼ばれる人々へ関心が高まっている。その背景として、そのようなカテゴリによって名指される・名乗る人々が増加したことに加え、混濁的なアイデンティティの受容が、果たして既存の人種／エスニック・ラインを揺るがすのか否かという大きな問いが追及されてきたことが挙げられる（例えば、Song 2014）。一方で、これらの研究では、“mixedness”をめぐる境界そのものについて、十分には問うてこなかったように思われる。例外的に国際比較研究で、“mixedness”をめぐる基準がいかに社会によって異なるのかが論じられてきた（例えば、Rocha 2018）。

一方、日本社会において、混濁的なカテゴリとして挙げられるのが、日常的な文脈で用いられる「ハーフ」（例えば、下地2018, Törngren and Sato 2019）や、支援の文脈などで用いられる「外国につながる子ども・若者」である（Shiobara and Suzuki 2020: 263）。これまで、「ハーフ」をめぐる表象に偏りがあることは指摘されてきたものの（例えば、岩淵編2014）、これらカテゴリの境界そのものについては、既存の研究では十分には問われてこなかった。

そこで、本稿では、日本社会における「ハーフ」・「外国につながる子ども・若者」をめぐる境界について検討する。そのために、博士課程学生研究支援プログラムによって助成を受けた調査のうち、以下のフィールドワークの調査結果を参照する。第一に、外国にルーツがないにもかかわらず、他者から頻繁に「ハーフ」と勘違いされる人々11名へのインタビュー調査である。第二に、神奈川県や愛知県における「外国につながる子ども・若者」に対する支援団体・当事者団体でのフィールドワークである。以下で、それぞれを検討したい。

### 2. 「ハーフ」としてのカテゴリ化

人種・エスニシティは社会的な構築物でありつつも、人々の生活に社会的な影響を与え続けている（竹沢 2009: 2）。このことは、人種・エスニシティ研究におけるコンセンサスとなっている。だが、人種・エスニシティが社会的な構築物であるのならば、これまで“mixed race” studiesや「ハーフ」研究における被調査者、とりわけインタビューにおける調査対象者のほとんどが「血」と「祖先」を基準として選ばれていることは疑問である。すなわち、“mixed race” studiesにおいては、複数の人種的（あるいはエスニックな）背景を持つとされる者、日本の「ハーフ」研究においては、「日本人」と「外国人」の間に生まれる者が当事者とされることがほとんどである。

一方、Rogers Brubakerは、構築主義を標榜する人種・エスニシティ（そしてネーション）の研究者が、内部における同質性と外部における境界によって規定される「集団」として、人種・エスニシティ（そしてネーション）を捉えていることを批判する（Brubaker 2002）。彼によれば、それらは、「世界の中の事物（things in the world）」ではなく、「世界に対する見方（perspectives on the world）」だからである（Brubaker, Loveman, and Stamatov 2004）。

以上のような人種・エスニシティに対する認知的視座に基づき、本研究では、以下のような対象者に対してインタビュー調査を行った。すなわち、外国にルーツがないとして自己認識しているにもかかわらず、他者から頻繁に「ハーフ」や「外国人」に間違えられる若者11名である。そして、以下の四つの問いを立てた。①かれらはなぜ、そのようにカテゴリ化されるのか。②かれらはそのようなカテゴリ化を、どう解釈しているのか。③かれらはそのようなカテゴリ化に対して、どのように反応しているのか。④「ハーフ」や「外国人」としての他者からのカテゴリ化は、かれらの自己理解（アイデンティフィケーション）にいかなる影響を与えているのか。これらの問いに対しては、現在別稿で詳しく分析・執筆中のため、ここでは調査結果の概略をいくつか述べるに留める。

調査の結果、かれらは、見た目、言語、振る舞い、住んでいた場所などによって他者から「ハーフ」や「外国人」として勘違いされることが分かった。しかし、ひとたびかれらが自らの両親がともに「日本人」であるとして、「ハーフ」や「外国人」であることを否定すると、多くの場合、その主張は他者に受け入れられる。すなわち、最終的な基準として「血」が用いられているのである。

### 3. 「外国につながる子ども・若者」への支援団体・当事者団体へのフィールドワーク

次に、2019年度に行った「外国につながる子ども・若者」の支援団体・当事者団体へのフィールドワークの概要と結果について報告する。筆者は、①「外国につながる子ども」への支援を行う、神奈川県内の団体A主催の日本語・教科の支援教室、②元教師が中心となって「外国につながる若者」へのキャンプやイベントを行っている神奈川県の団体B、③愛知県の団体C主催の「外国につながる中高生」を主要なターゲットとしたキャンプ、④Bと繋がりが濃い「外国につながる若者」の当事者団体であり、ピア・サポートを行う団体Dの活動、⑤日本とブラジルにルーツを持つ個人（e氏とする）が企画し、外国に「ルーツ」と「ルート」を持つ若者を中心に自らの経験をシェアするEの会の四つを中心に、現在進行形でフィールドワークを行っている。以下では、これらのフィールドワークを通じて明らかになったことや、浮かんできた問い・課題を論じたい。

第一に、これらの団体では、支援の対象となる人々や「当事者」としてメンバーシップを持つ人々を規定する際に、必ずしも「血」だけを基準としていない点が明らかになった。団体Aでは、「外国につながる」とはむしろ、日本語に困難を抱えているか否かが基準となっていた。団体Cでは、文部科学省が指定するスーパーグローバルハイスクールなどに通う「将来のエリート」は、キャンプの主要なターゲットから外されていた。また、Eの会でも、外国につながるという「ルーツ」だけではなく、外国に住んでいた「帰国子女」や留学経験者が含まれるなど「ルート」が主たる基準となっていた。このように現場では、本質主義的な基準と構築主義的な基準の両方が用いられている。

第二に、そのような二つの基準のために、現場では「当事者とは誰か」をめぐる問いが引き起こされる。ピア・サポートを目的とする団体Dでは、現時点で支援者である大人1名を除いて、筆者も含めてメンバーの全員が「外国にルーツを持つ」と思われる。しかし、同団体では常に定期的に会議に参加す

るメンバーが不足している。そのため、新メンバーをリクルートする際の基準として、同団体が「外国にルーツがない人」にもオープンであるのか否かについて論争が生じた。

第三に、これらの団体の活動では、若い世代を中心に「ハーフ」という語が普通に用いられる一方で、「ハーフ」をめぐる「揺れ」も同時に経験している。現場には二つ以上のルーツを持つ人々がおり、かれらのなかには「ハーフ」として自己を捉える者がいる反面、「日本人と外国人の間に生まれた人」という基準に当てはまらないために、自己を「ハーフ」と捉えていいのか分からないという人もいた。例えば、3つ以上の複数のルーツを持つ人々、日本にルーツがないものの、両親が異なる国出身の人々などである。また、支援者のなかには、「ハーフ」や（従来支援者がより好んで用いてきた）「ダブル」の存在を把握している者が多い。しかし、他の「外国にルーツを持つ人々」とは異なる、「ハーフ」や「ダブル」に特有の問題が何であるのかについては、支援者は必ずしも見出していないようである。

#### 4. おわりに

以上の二つの調査を総括する。一つ目の調査では、調査対象者は、「見た目」や「言語力」といった基準によって、はじめて出会う他者によって、「日本人」か「外国人」か「ハーフ」かといった判断がくだされていた。また、最終的には、「血」が一つの大きな基準となっていた。一方、二つ目の調査では、「外国につながる子ども・若者」は、「血」によってのみメンバーシップを与えられるものではなく、日本語能力や階層といった別の基準も参照されていた。また、そのメンバーシップと誰が「ハーフ」であるのかは揺れ動くものであることがわかった。

このように、「ハーフ」や「外国につながる子ども・若者」が誰であり、かれらに特有の問題がなにであるのかという問いは、必ずしも当たり前ではないものではない。今後、「ハーフ」や「外国につながる子ども・若者」にかかる問題を他人事のものとしなないためには、当事者を固定化しないことが重要である。また、私たちがいかに当事者になりえるのかを追求する必要がある。

#### 5. 関連業績

- ・〈グループ発表、査読なし、招待あり〉オーガナイザー：岩渕功一，下地ローレンス吉孝，パネラー：下地ローレンス吉孝，ケイン樹里安，○佐藤祐菜，有賀ゆうアニース，小ヶ谷千穂「多様な多様性を多様につなぐ：〈ハーフ・混血・ミックス〉研究と移民・エスニックマイノリティ研究との協働」『カルチュラル・タイフーン2019』，東京，2019年6月2日。
- ・〈口頭発表，査読あり〉○Yuna Sato “Who is Considered ‘Mixed’ in Japan: Methodological Exclusion by Researchers?”，IMISCOE Annual Conference, Malmö, Sweden, (June, 2019).

#### 6. 参考文献

- Brubaker, Rogers. 2002. “Ethnicity without Groups.” *European Journal of Sociology* 43(2): 163–89.
- Brubaker, Rogers, Mara Loveman, and Peter Stamatov. 2004. “Ethnicity as Cognition.” *Theory and Society* 33(1): 31–64.
- Rocha, Zarine L. 2018. “Re-Viewing Race and Mixedness: Mixed Race in Asia and the Pacific.” *Journal of Intercultural Studies* 39(4): 510–26.
- Shiobara, Yoshikazu, and Mikako Suzuki. 2020. “A Theoretical Perspective for Overcoming Exclusionism.” Pp. 259–72 in *Cultural and social division in contemporary Japan: rethinking discourses of inclusion and exclusion*, edit-

- ed by Y. Shiobara, K. Kawabata, and J. Matthews. New York: Routledge.
- Song, Miri. 2014. "Does a Recognition of Mixed Race Move Us toward Post-Race?" Pp. 74–93 in *Theories of Race and Ethnicity: Contemporary Debates and Perspectives*.
- Törngren, Sayaka Osanami, and Yuna Sato. 2019. "Beyond Being Either-or: Identification of Multiracial and Multi-ethnic Japanese." *Journal of Ethnic and Migration Studies* 0(0): 1–19.
- 岩淵功一編, 2014, 『〈ハーフ〉とは誰か: 人種混淆・メディア表象・交渉実践』青弓社.
- 下地ローレンス吉孝, 2018, 『「混血」と「日本人」: ハーフ・ダブル・ミックスの社会史』青土社.
- 竹沢泰子編, 2009, 『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店.